

第 11 冊

『蘇我氏～古代豪族の興亡』

倉本一宏、中公新書、2015年
(上)

悲劇の豪族：蘇我氏

一般的に、「蘇我氏は大化の改新で滅びた」と言われています。でも、滅びたのは「蘇我本宗家」であって、蘇我氏そのものはこの後も続いていきました。一方、大化の改新を主導した中臣鎌足の子孫である藤原氏は奈良時代の攻防のあと、平安時代には他氏排斥を完成させて権力を掌中におさめました。

それに比べて、蘇我氏は古代日本史においては常に悪者扱いされています。私は昔から、「蘇我氏はほんとに悪者やったんやろか?」「蘇我氏って可哀相や」と常々思ってきました。

突然ですが、あなたは、蘇我氏と藤原氏のどちらが好きですか？

どうでしょう？藤原氏ですか？蘇我氏ですか？結構、答えに窮する人が多いかもしれません。

違う質問です。あなたは、源義経と源頼朝、どちらが好きですか？

こちらは、結構、義経が好き（頼朝が嫌い）という声が多いような気がします。なぜなら、日本人って、「**判官鼻真**」の人が多いですね。

私の場合、蘇我氏と藤原氏を比較したときに、断然「蘇我氏が好き」「藤原氏は嫌い」となります。蘇我馬子は能力抜群だし、政治家としても魅力的な人物です。蝦夷や入鹿も政治家としては立派な人物だと思います。

その蘇我氏について書かれたのが本書『蘇我氏～古代豪族の興亡』です。その作者が倉本一宏氏です。

歴史（特に古代史）好きな人ならご存じでしょうが、著者の倉本一宏さんについて、紹介しておきましょう。専門は日本古代政治史、古記録学という歴史学者で、現在は国際日本文化研究センター（日文研）・総合研究大学院大学（総研大）文化科学研究科 国際日本研究専攻教授です。1958年、三重県津市生まれ。1983年、東京大学文学部国史学専修課程卒業。1989年、同大学院人文科学研究科国史学専門課程博士課程単位修得退学。1997年「日本古代国家成立期の政権構造」で博士になりました。

実は、私は倉本一宏先生の講演会に参加したことがあります。2016年12月に京都アスニーセミナーがありまして、『蘇我氏の興亡～飛鳥から平安まで～』というテーマのお話でした。つまり、今回取り上げる本の内容をダイジェストで話して頂けたその場に参加させて頂いていたのです。

倉本一宏氏はテレビでもよく見かけます。NHK『英雄たちの選択』では何度も出演されていますし、NHKラジオの『NHK歴史再発見』で「日記が明かす平安貴族の実像」も放送されていました。

結構一刀両断に、ズバッと語られるのが格好いいという印象があります。

主な著書を列挙しておきます。

- 『日本古代国家成立期の政権構造』（吉川弘文館、1997年）
- 『奈良朝の政変劇 皇親たちの悲劇』（吉川弘文館、1998年）
- 『摂関政治と王朝貴族』（吉川弘文館、2000年）
- 『歴史の旅 壬申の乱を歩く』（吉川弘文館、2007年）
- 『持統女帝と皇位継承』（吉川弘文館、2009年）
- 『藤原道長の日常生活』（講談社現代新書、2013年）
- 『藤原道長の権力と欲望 「御堂関白記」を読む』（文春新書、2013年）
- 『平安朝 皇位継承の闇』（角川学芸出版〈角川選書〉、2014年）
- 『戦争の日本古代史 好太王碑、白村江から刀伊の入寇まで』（講談社現代新書、2017年）
- 『藤原氏 権力中枢の一族』（中公新書、2017年）
- 『内戦の日本古代史 邪馬台国から武士の誕生まで』（講談社現代新書、2018年）



蘇我氏は滅んでいない

倉本一宏氏は『蘇我氏～古代豪族の興亡』のなかで、次のように言い切っています。

蘇我氏は大化の改新（乙巳の変）によって滅亡したわけではない。滅ぼされたのは蝦夷・入鹿といった蘇我氏本宗家のみであって、その後も中央豪族である大夫（マヘツキミ）層を代表し、倭王権を統括する大臣（オホマヘツキミ）家としての蘇我氏の地位は揺らぐことはなかった。蘇我氏の氏上が蝦夷・入鹿系から倉麻呂系に移動したに過ぎないのである。

同様に、蘇我氏出身の女性が大王家のキサキになることも、引き続き行われた。蘇我氏の血を引く王族は、奈良時代の半ばに至るまで、重要な位置を占めることになる。

そして、蘇我氏は氏族としての在り方を変えながらも、古代を生き延び、中世を迎えている。これは他の古代豪族と何ら変わりのない歩みである。

また、蘇我氏は元来、決して旧守的な氏族ではなかった。それどころか、蘇我氏は、倭国が古代国家への歩みを始めた6世紀から7世紀にかけての歴史に対して、最も大きな足跡を残した先進的な氏族であった。渡来人を配下においての技術や統治の方式、またミヤケ（屯倉）の経営方式に見られる地方支配の推進を見ていると、蘇我氏主導であっても、つまり、たとえ乙巳の変や白村江の戦いや壬申の乱が起こらなくても、遅かれ早かれ、いずれは倭国は古代国家へと到達していったのではないかと思われる。

稲目が蘇我氏の始祖！

蘇我氏とは

蘇我氏は一体何ものでしょうか？どこから現れたのでしょうか？何か突然、日本の歴史の中央舞台に現れたように見えるのですが。

蘇我氏の出自については、いくつかの説があります。

1つめは、神功皇后の三韓征伐などで活躍した伝説の忠臣・武内宿禰（たけのうちのすくね）が祖であるという説

2つめは、5世紀ごろ、仁徳天皇、履中天皇、雄略天皇の皇后や皇妃を一族から出し、天皇家の外戚として権勢をふるっていた葛城一族がその前身であるとする説

3つめは、仁徳天皇の治世に、朝鮮半島の百済から渡来した人々を祖とする説

3つめの、「蘇我氏は朝鮮半島から渡ってきた渡来人」という学説は、現在では完全に否定されているそうです。

この説が出された背景として、当時は「騎馬民族征服説」や「三王朝交代説」に象徴されるように、倭国の文化や政治の源流を何でも朝鮮諸国に求めると言った風潮があったものと推測されます。

また、さらに、これが世間に広く受け入れられた背景となると、さらに根深いものがあるようです。

蘇我氏を「悪者」と決めつけた上で、当時の日本人の潜在意識の中には、「悪いことをするのは外国人に違いない」と言った思い込みがあったのではないかと思います。

では、蘇我氏はどこから登場したのでしょうか？

倉本一宏氏は『蘇我氏～古代豪族の興亡』のなかで、次のように主張されています。

蘇我氏はいきなり登場したのではなく、葛城集団の勢力の主要部分が独立したものであり、記紀に見える「葛城氏」とは、すなわち蘇我氏が作り上げた祖先伝承だったのである。

蘇我氏とは、大和盆地南西部の葛城地方に基盤を持った葛城集団から、稲目の代に独立した集団である。ただし、これを葛城氏の支族に当たる集団で滅亡を免れた残党勢力が、本宗家の没後に現地で次第に勢力を拡張して、やがて第二の拠点とも言うべき高市郡曾我の地に居を定め、新たに曾我のウチを名乗るようになったというように、蘇我氏を葛城氏の複数の支族のうちの1つと考える必要もあるまい。

氏（ウチ）という政治集団の成立が、記紀から葛城氏の活躍が見えなくなる6世紀に下るのであるから、元々葛城氏なる政治組織が成立した際に、葛城地方を地盤とした複数の集団の中から有力な集団が編成され、蘇我氏として独立したと考えれば良いだけのことである。

残った者たちの中には、後に述べるように蘇我氏同族として独立する者も現れたし、それから残った者がわずかに葛城臣を称したので、それらは顕著な活動を残すことができず、あたかも葛城氏が没落したかのように見えるのであろう。・・・・・・・・

蘇我氏は、この曾我の地を地盤とすることによって氏として成立し、葛城集団の勢力の大多数を傘下に収めた。そして葛城集団が持っていた政治力と経済力、対朝鮮外交の掌握や渡来人との関係、また大王家との姻戚関係という伝統をも、掌中にしたものと思われる。蘇我氏というのは、突然に出現した集団ではなく、その成立時から突出した政治力や経済力、そして尊貴性を倭王権から認められた存在だったのである。・・・・・・・・

蘇我氏は「文字」を読み書きする技術、鉄の生産技術、大規模灌漑水路工事の技術、乾田、須恵器、綿、馬の飼育の技術など大陸の新しい文化と技術を伝えた渡来人の集団を支配下に置いて組織し、倭王権の実務を管掌することによって政治を主導することになった。

おー、そうなんですね。蘇我氏は葛城氏から稲目の時に独立した一族だったということなんです。そして、稲目が「活躍」することで、蘇我一族の力や影響力が大きくなり、葛城氏の中の一部が蘇我氏の支配下に入り、彼らも権力に近づいていったということになります。もちろん、そういう配下が増えることで、蘇我氏自身が大きく強く豊かになっていったのでした。

ところで、あなたは蘇我氏が「臣」という姓をもらっていたことを知っていますよね。さらに、「臣」姓の中の有力者である蘇我氏が「大臣」という役職にも就きましたよね。『日本書紀』には蘇我稲目が大臣になる前に、武内宿禰・葛城円・平群真鳥・許勢男人といった人物が大臣になっていたと記載がありますが、史実性に乏しいと倉本一宏氏は否定します。

大臣（オホマヘツキミ）という職位は、蘇我氏のみが就いた職位と考えられる。・・・・大臣（オホ

マヘツキミというのは、稲目から馬子・蝦夷という蘇我氏本宗家の三名（実質的には入鹿も含めた四名）に受け継がれていった職位（ツカサ）である。マヘツキミの代表であるとともに、マヘツキミによる合議体を主宰し、倭王権を代表して外交の責任者となった。

同様に、大連（オホムラジ）という職位が『日本書紀』に見えるが、この地位が職位として実在したとは考えがたい。「大連」とは、連（むらじ）姓氏族内部において自己の祖先を顕彰するために、七世紀後半以降、「連」という姓に美称「大」を付すことによって造作された敬称であろう。

上記のように、「大連」という職位を否定されます。うーん、教科書とは全く違うので、この辺りはどのように授業で触れたら良いのか、ちょっと迷います。

蘇我氏と王位継承

平安時代に藤原氏が天皇の摂政や関白となって権力をほしいままにしていきましたが、その源泉の一つが「**天皇の外戚になる＝外戚政策**」と言うことでした。もう一つ、**大きな柱がありましたが、何でしたっけ？**

そう、「**他氏排斥**」でしたね。承和の変（842年）、応天門の変（866）阿衡の紛議（887～888）、昌泰の変（901）、安和の変（969）などの変により、藤原以外の有力氏族が権力から排除されてきました。

蘇我氏も藤原氏に先立って「天皇の外戚」になり、権力をほしいままにしていきました。

蘇我氏の始祖である稲目の娘の**堅塩媛（きたしひめ）**と**小姉君（おあねぎみ）**は**欽明天皇**の妃となりました。堅塩媛は橘豊日大兄王子（後の用明天皇）をはじめとする7人の王子と額田部王女（後の推古天皇）を含む6人の王女を産みました。一方、小姉君は泊瀬部王子（後の崇峻天皇）を含む4人の王子と1人の王女を産みました。

稲目の娘二人はたくさんの王子を産みました。とても重要なことですね。跡継ぎが産まれなければ、天皇家を、そして蘇我氏の時代を継続することができないのですから。

倉本一宏氏はさらに続けます。

欽明は、蘇我氏出身のキサキと、石姫王女（いしひめのひめみこ、宣化の女）という大王家出身のキサキの両方から後継者を儲け、蘇我氏嫡流（しかも堅塩媛系・小姉君系という2系統の蘇我系）と非蘇

我系嫡流を創出した。この後の倭国における大王位継承をめぐる動きは、これらの蘇我系、非蘇我系の王子王女を軸として、繰り広げられることになるのである。

なお、王権継承に血縁原理が導入されたのは5世紀代のことであり、6世紀の男大迹（おおど、継体）・欽明期に至って大王を生み出し得る特殊で神聖とされる血縁集団（大王家）が形成され、血縁原理が王権継承の基盤に据えられた。この血縁原理による大王位継承も、欽明と稲目によって確立したのである。

蘇我氏の開明性

私は蘇我氏が「優秀」であった、と思っています。蘇我氏は「守旧派」「保守派」ではなく、むしろ「改革派」「開明派」であると思います。

飛鳥の地で大王（天皇）を中心とした国家造りを始めていたとき、蘇我氏はどんなことをしていたのでしょうか？天皇家がやろうとしている改革の邪魔をしていたのでしょうか？

倉本一宏氏は以下のように説明します。

律令国家体制の基本的性格を、公地公民を基礎とした個別人身支配と規定するならば、その先駆的な支配方式が、蘇我氏の主導で設置されたミヤケ（屯倉）の経営方式に見られるのである。

『日本書紀』の欽明期・敏達期からは、吉備の白猪屯倉（しらいのみやけ）・児島屯倉（こじまのみやけ）の経営を窺うことができる。・・・それによると、欽明16年（555）と17年に大臣稲目が吉備に派遣されて、白猪屯倉・児島屯倉が設置されたが、児島屯倉においては葛城山田直端子（やまだのあたみつこ）を田令（たつかい）に拝して監督させた。そして、周辺の農民を田部として挑発し、その徭役（ようえき）労働によって経営を行った。欽明30年（569）には、蘇我氏と関係の深い船（ふね）氏の祖王辰爾（おうしんに）の甥である膽津（いつ）を白猪屯倉に派遣して白猪田部の丁（よほろ）の籍（ふみた）を定めている。敏達3年（574）にも大臣馬子が吉備に派遣され、白猪屯倉と田部を増益した。

この時に稲目が作成した田部の名籍は、現実存在した単位集団をそのまま「戸」として、田部の丁の名を書き連ねたものと見られる。律令制的人身支配、及び領域支配への指向は、すでにここに現れていたのである。なお、白猪屯倉は美作一帯で鉄山の多い地方に置かれたが、これは豊かな鉄資源を倭王権が掌握したものであると言われる。また、児島屯倉は瀬戸内海の有力な水軍を直属させて、新羅との対決に備えたものとされている。

なお、同じ欽明17年には、稲目は大倭（やまと）国高市（たかいち）郡に派遣され、韓人大身狭（からひとのおおむさ）屯倉と高麗人小身狭（こまびとのおむさ）屯倉を設置している。身狭とは見瀬（現檀原市見瀬町）のことである。こちらは韓人（百濟人）や高麗人を田部としている。

このような方式の地方支配を推進していけば、たとえ乙巳の変や白村江の戦いや壬申の乱が起こらなくても、遅かれ早かれ、いずれは倭国は古代国家へと進んでいったのではないと思われる。いやむしろ、中大兄王子がたどった迂遠（うえん）な道程を考えるならば、どちらが効率的で効果的な方式であ

ったかは、一概には論じられない問題であろう。

蘇我氏をすべて悪と決めつけ、「聖徳太子」や中大兄王子による「天皇中心の中央集権国家」の建設を善と認識する歴史観では、この蘇我氏の開明性を説明できない。

蘇我氏が「優秀」であった、と私が思う理由の1つが、仏教の導入です。蘇我稲目の代から物部氏や中臣氏らと「崇仏論争」という名前の政治的抗争を展開します。仏教を日本に取り入れるかどうか、について蘇我氏は積極的に導入しようとしていきました。反対する物部氏を力でねじ伏せたのが蘇我馬子（稲目の子）でした。

敏達13年（584）に、馬子は仏像2体（1体は百済からもたらされた弥勒石像）を手に入れたが、これを高句麗の恵便（えべん）という還俗僧と、新たに出家した司馬達等（しばたつと）の娘である島（しま、法名善信尼、ぜんしんに）、およびその弟子である二人の尼に祀らせた。

馬子はまた、仏殿を自宅の東に造営し、弥勒石像を安置して法会を営んだ。この時に仏舎利も出現したとある。『日本書紀』が「仏法の初め、これより作（おこ）れり」と謳ったように、これは草堂仏教の時代から伽藍仏教の時代への移行を告げるものであり、『日本書紀』編者はここに日本仏教の真の意味での開幕を認めたのである。・・・・・・・・・・

ところがこの後、残念なことに馬子が当時流行していた疫病に罹ってしまいました。占いをを行ったところ、「父（稲目）の時に祭った仏神の祟り」との答えが出ました。馬子がこれを敏達天皇に奏上すると、敏達天皇は、「父の神を祭（いわ）い祀れ」との詔を下したといひます。

それに対して、物部守屋と中臣勝海（かつみ）が、疫病の流行は蘇我氏が仏法を信仰しているためであると敏達天皇に奏上します。そして、敏達天皇は仏法を止めるよう命じることになりました。

さらに、物部守屋は寺に赴いて塔を切り倒し、仏像と仏殿を焼き、残りを難波の堀江に棄てた、といひます。そして尼たちを梅石榴市（つばきち）で鞭打ちに処します。

馬子が仏法の信仰を奏上すると、敏達天皇は馬子だけの崇仏を許可して尼たちを返し、馬子以外の信仰を禁止します。

その直後、今度は敏達天皇が亡くなります。そして、営まれた殯宮（もがりのみや）で奏上された誄（しのびごと）儀礼において、馬子と守屋の怨恨が頂点に達しました。

長い刀を差して弔辞を読む小柄な馬子に対して、守屋が「獵箭中（ししやお）へる雀鳥（すすめ）の如し（まるで矢に射られた雀のようだ）」と笑ひます。今度は、緊張で体を震わせながら弔辞を読む守屋に対して、馬子が「鈴を懸くべし（鈴を付けたらさぞ面白かろう）」と笑ったといひます。

なんか、子供じみていますね。ほんとにそんなことをしたのでしょうか？

さて、この後の動きです。敏達天皇の後には**用明**が天皇位に就きました。欽明天皇の王子の世代における蘇我系（その中でも堅塩媛系）の嫡流です。体の中に占める蘇我氏の血の割合（以後、「**蘇我氏濃度**」と称する）は**2分の1**です。この結果、**蘇我氏ははじめて大王家の「外戚」の地位を手に入れたのです。**

なお、用明天皇は587年に病気に苦しみ仏教に帰依しようとしてしました。群臣（マヘツキミタチ）に議定させたところ、物部守屋と中臣勝海は反対しますが、馬子は用明天皇の詔に随うべきであると主張します。用明天皇の異母弟である**穴穂部（あなほべ）王子（蘇我氏濃度2分の1）**は豊国法師を連れて宮に入ったといいます。大王家でも徐々に仏教信仰が興ってきているんですね。

用明天皇が亡くなると、物部守屋が蘇我系でも小姉君系に属する穴穗部王子を擁立しようとしたことを知った馬子は、敏達天皇の太后であった豊御食炊屋姫の「詔」を奉じて穴穗部王子を誅殺し、諸王子とマヘツキミ層を糾合して物部守屋を討滅しました。いわゆる「物部戦争」です。

この時に、馬子の麾下に参加した王子は、『日本書紀』によれば、泊瀬部（はつせべ）王子（後の崇峻、蘇我氏濃度2分の1）、竹田王子、**厩戸王子（蘇我氏濃度2分の1）**、難波王子（蘇我氏濃度0）、春日王子（蘇我氏濃度0）であった。泊瀬部王子のみが欽明の子、他は1世代下の、用明の蘇我系のキサキである穴穗部間人王女（あなほべのはしひとのひめみこ、蘇我氏濃度2分の1）が産んだ厩戸皇子王子と、敏達王子の竹田王子、難波王子、春日王子です。

この戦乱の後に定められた大王は、ただ一人の欽明の蘇我系王子（小姉君系）の生き残りである泊瀨部王子でした。彼は即位して**崇峻天皇**となります。しかし、

崇峻天皇はいくつかの問題で、支配者層内部の分裂を招いてしまう。最初の齟齬は、崇峻のキサクをめぐって起きた。崇峻は大伴糠手（あらて）の娘の小手子（こてこ）を妃とし、小手子は蜂子王子（はちこのみこ）と錦代皇女（にしきてのひめみこ）を産んだとある。・・・。

連姓の氏族は、本来はキサキを出すことはなかった。大王家とのミウチ的結合を第一の権力の基盤としている蘇我氏にとっては、これはかなり危機的な事態であったに相違ない。大伴氏所生の蜂子王子が次代に即位でもしたら、蘇我氏は完全に「ヨソ人」になってしまい、崇峻系が大王家嫡流の座を覗うことになる。・・・・・・・・・・・・・・・・

ついで崇峻元年(588)、馬子が発願した飛鳥寺(法興寺)の建立が、飛鳥真神原(まかみのはら)の地で始まった。この年には、百済から仏舎利がもたらされ、寺工(てらたくみ)・鑪盤博士(ろばんのはかせ)・瓦博士・画工(えかき)など、ペルシャ系・西域系も含めた技術者が渡来している。これに先立って、敏達6年(577)に百済から造仏工と造寺工が渡来しているが、この間、倭国において造寺造仏の技能伝習が行われていたという指摘もある。飛鳥寺の建立が支配者層内部の意見の対立を招いたかどうかは明らかではないが、未だ仏教が全面的に受容されているとはいいがたいこの時期の本格的な大伽藍寺院の建立には、これに賛同しない勢力も、当然ながら存在したはずである。

崇峻天皇を殺害し、さらに実行犯の東漢駒を殺害したということで、一昔前までは崇峻殺害事件が、逆臣にして非道な蘇我氏を象徴する事例として認識されていました。しかし、蘇我氏を敵視しているはずの『日本書紀』では、蘇我馬子を非難しているようには読み取れません。マヘツキミ層がこの事件で動揺したという記述也没有ありません。

ということは、蘇我馬子はおそらくはマヘツキミ層の同意のもと、崇峻天皇を殺害し、即日、倉梯岡陵（くらはしのおかのみささぎ）に葬ってしまったと思われます。

さあ、天皇がいなくなりましたから次の天皇を選ばなければなりません。候補者にはどんな人がいたのでしょうか？

この時、欽明の孫（2世王）の世代には、即位した天皇の王子だけでも、敏達天皇と「息長真手王（おきながのまてのみこ）」の娘広姫との間に生まれた押坂彦人大兄王子（すでに死去していた可能性も高いようですが）、敏達天皇と豊御食炊屋姫との間に生まれた竹田王子、尾張王子（おわりのみこ）、（ともに「蘇我氏濃度」4分の1）、用明天皇と穴穂部間人王女との間に生まれた厩戸王子、来目王子（ともに「蘇我氏濃度」2分の1）など、多数の王子がいました。

こうなると、蘇我馬子やマヘツキミ層も、誰を撰べば良いか分からなかったのかもしれませんが。さらに、各氏族が別々の王子を支持して政治抗争を始めることは、隋が中国を統一した状況なので、どうしても回避したい事態だったはずで。

そのような背景で、推古天皇が誕生します。つまり、氏族間の紛争を避けるための緊急避難的な措置として、それまで前大后として政治紛争の解決や調整に実力を見せてきた欽明の王女である39歳の豊御食炊屋姫（とよみけかしきやひめ）を即位させるというのは、これ以上ない妙案だったのかもしれませんが。こうして、日本の歴史上初めて、女帝が出現しました。

トロイカ体制確立

推古天皇が登場した頃の、東アジア情勢は緊迫していました。つまり、中国では北朝から興った隋が、589年、南朝の陳を滅ぼして、実質400年ぶりに統一王朝を建設したのです。そして、隋は周辺諸国への圧迫を強めていきます。そして、倭国は、崇峻4年（591）に編成された新羅遠征軍を、4年後の推古3年（595）まで筑紫に駐留させるなど、新羅との対抗関係を強めていきました。

このような激動の東アジア国際情勢の中、推古天皇・厩戸王子（うまやとのみこ）・大臣（オオマヘツキミ）蘇我馬子という三者の共治による権力集中が図られました。

推古天皇、厩戸王子（聖徳太子）、蘇我馬子の三者が共同で政治を行っていますが、その中で誰が中心・中核なのでしょう？

これは、もちろん、蘇我馬子なのは明らかですね。厩戸王子が「摂政」になった時に蘇我馬子は大
臣として20年余も活躍していました。年齢も50歳を超えていたと思われます。しかも、厩戸王子にと
って馬子は祖母の弟であり、どんなに英傑だったとしても、馬子を見下して勝手なことはできるはずが
ありません。

さて、ここで3つ質問があります。

質問1. 蘇我馬子と推古天皇とはどういう関係ですか？

質問2. 推古天皇と厩戸王子とはどういう関係ですか？

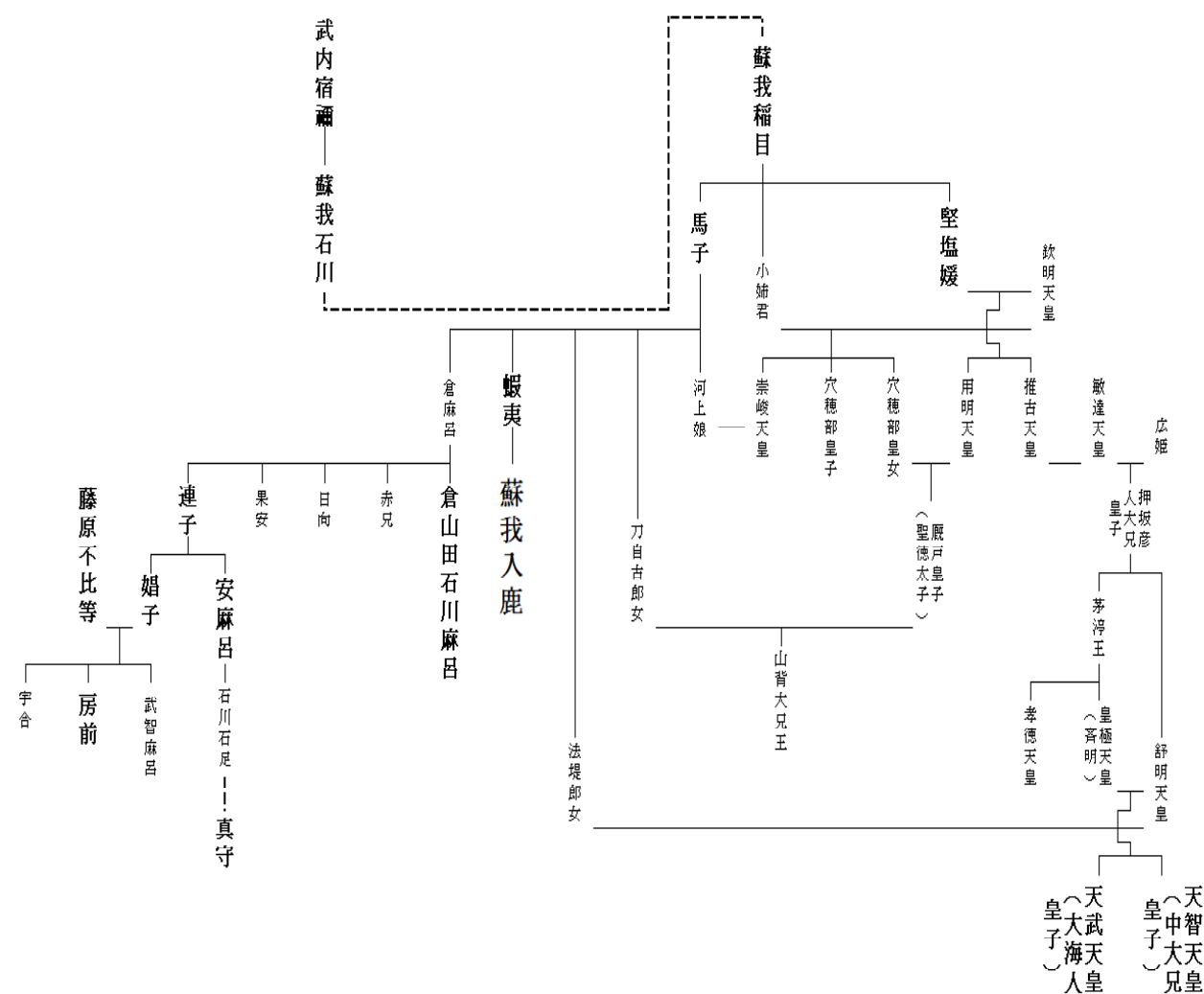
質問3. 最後に、蘇我馬子と厩戸王子とはどういう関係ですか？

次ページの天皇と蘇我氏の系図を見ながら、教えてください。

質問1. の答えは、馬子の姉堅塩媛と欽明天皇の間に産まれたのが推古天皇ですから、「おじ・めい」
の関係ですね。

質問2. の答えは、推古天皇の兄用明天皇と穴穂部皇女との間に産まれたのが厩戸王子＝聖徳太子な
ので、「おば・おい」の関係ですね。

質問3. の答えは、馬子は太子のおばあちゃんの兄弟ですが、蘇我馬子の娘刀自郎女と厩戸王子は
結婚していますから、馬子と太子の関係は「義理の父子」ということになりますね。



蘇我氏と大王家の系図

推古天皇も厩戸王子も蘇我氏の血が流れていて、いわば蘇我の「家族」「一員」という状況です。ですから、この三者は蘇我氏を核として血縁で結ばれた王権を造り上げているわけですね。ですから、推古朝のことを「蘇我王朝」と呼ぶこともあります。

そして、この三者の周囲に諸豪族を結集させることによって権力を集中し、隋との国交を軸として、朝鮮諸国に対する国際的な優位性を確立しようとしていったのです。

かつては「**聖徳太子**」対「**蘇我馬子**」といった対立図式が想定され、馬子が「聖徳太子」の国政改革（「天皇中心の中央集権国家の建設」云々）を妨害したとか、「聖徳太子」は権力闘争に敗れて斑鳩宮（法隆寺東院地下遺構）に逼塞し、仏教信仰に専念したとかいった考え方が流布していた時代がありました。そんなことは決してない、と著者の倉本一宏氏は『蘇我氏～古代豪族の興亡』のなかで主張します。さらに、続けて

厩戸王子が就いたとされる「皇太子」という地位、及び「摂政」という職位は、当時はまだ成立していなかった。厩戸王子は押坂彦人大兄王子および竹田王子が死亡した後に、有力な皇位継承資格者として政治に参画したに過ぎないのである。・・・馬子が女の刀自古郎女（とじこのいらつめ）を厩戸王子に配していることも考慮に入れるならば、馬子にとって、厩戸王子が次の代の王統の祖に坐ることは、既定の方針であったと考えるべきであろう。・・・・・・・・・・・・・・・・

三者の関係だけではありません。この間、蘇我氏と天皇家との関係も、より強固なものとなっていきました。厩戸王子の妃となっていた**蘇我刀自古郎女**は、**山背大兄王**、財王（たからのみこ）、日置王（ひおきのみこ）を産み（ともに「蘇我氏濃度」4分の3）、厩戸王子の後継者として斑鳩の地に巨大な勢力を有していました。

また、刀自古郎女の妹の法提郎女（ほてのいらつめ）は田村王（後の舒明）の妃となっていました。法提郎女はやがて古人大兄王（「蘇我氏濃度2分の1」）を産みます。

ですから、**馬子は蘇我系王統、非蘇我系王統の双方と姻戚関係を結び、それぞれの後継者を儲けるとい、天皇家との強固な身内関係の構築に成功**したのです。

では、強固な絆をもったトロイカ体制により、この三者は、一体何をしたのでしょうか？

外交面＝遣隋使の派遣

倉本一宏氏の『蘇我氏～古代豪族の興亡』によると

この時期、隋は周辺諸国への圧迫を強め、583年に北方の突厥（とっけつ）を東西に分裂させた上で、598年以降、4次にわたって高句麗へ大軍を派遣した。朝鮮三国や倭国では、この世界帝国の強圧に対処するための権力集中を迫られることになった。高句麗は隋や新羅と対抗しながら、東突厥や百済、それに570年には、かつての敵国であった倭国とも連携した。

推古8年（600）、倭国はふたたび軍隊を朝鮮半島南端に派遣して新羅を攻め、新羅に「任那（任那加羅を中心とする四邑か）の調（みつぎ）」を要求した。新羅がふたたび「任那」に侵攻すると、推古10年（602）には新羅征討計画を立て、厩戸王子の弟である来目（くめ）王子が、翌推古11年（603）にはその兄の当摩（たぎま）王子が新羅征討将軍に拝されたが、結局は派兵されずに終わった。

その後は、厩戸王子の在世中は、新羅派兵が計画されることはなかった。対新羅関係の打開は、もはや隋との外交を基軸にしなければならない段階に達していたのである。594年に新羅が隋から冊封を受けたので、その新羅王を攻めることは、隋の天下を犯すことにもなるからである。

こうして、倭の五王以来、約120年ぶりとなる中国への遣使が行われることとなり、推古8年と推古15年（607）に遣隋使を派遣している。推古の代を代表する政策と言われる推古11年の冠位十二階

の制定と小墾田宮の造営、推古12年（604）の十七条憲法の制定とが、第1次遣隋使派遣と第2次遣隋使派遣の間に行われていることの意義は、見逃すべきではない。

ということです。

推古8年（600）の第1次遣隋使は、隋の文帝に、倭国の政治や風俗が「義理」のないものであると指弾されています。残念ながら、当時の倭国の使者は「国際常識」を兼ね備えておらず、隋の皇帝に「失礼」なことをしただけではなく、日本の文化的レベルが低いということをさらけ出してしまうという大失態を演じてしまったようです。

それだけではありません。自分たちよりも下位にあると思っている朝鮮諸国の方が自分たちよりもはるかに文明化していた（例えば、朝鮮三国の使者はその地位を表す冠と服を着していたはず）ことを目の当たりにして、大きな衝撃を受けたことでしょう。

帰国した倭の使者たちは、蘇我馬子や推古天皇にその報告をしたはずです。そこで、蘇我馬子や推古天皇、厩戸王子たちは、まずは執政や儀礼の場を整備することから手を付けていきました。具体的に言えば、「冠位十二階」や小墾田宮の建設、「十七条憲法」は、大帝国である隋と交際・交流し、朝鮮諸国に対する優位性を主張するための、文明国としての最低限の政治制度として作り上げていったのです。

そして、推古15年（607）に改めて派遣された第2次遣隋使は、その地位を表す冠を被り、倭国の政治理念を謳ったはずです。

推古15年に派遣された第2次遣隋使は、あの有名な「日出づる処の天子・・・」で始まる国書を持参していきました。

またまた、質問です。

質問1. 遣隋大使は誰でしたか？

質問2. この時の隋の皇帝は誰でしょうか？

質問3. 煬帝はある人物を日本に派遣することにしました。それは誰でしょうか？

質問4. ところで、この時の国書を読んだ煬帝は激怒したと言われます。何が煬帝を怒らせたのでしょうか？

質問1. の答えは、小野妹子でしたね。

質問2. の答えは、煬帝でしたね。

質問3. の答えは、裴世清でしたね。

質問4. の答えは、・・・

よく、日本のことを「日出づる処」と表し、隋のことを「日没する処」と表現したから、と言われてますが。それは間違いです。

この世界に「天子」は1人しかいません。もちろん煬帝のことです。にもかかわらず、小国の倭の王が「天子」と名乗るのは不屈き千万である、と怒ったのでした。

さらに言えば、この時の遣隋使を「対等外交を目指した」ものとするのも誤りです。そもそも、国力の差は歴然としていますよね。「小さい犬ほどよく吠える」と言われても仕方がない状況でした。

でも、今までの倭国の外交と全く異なることがあります。

「漢委奴国王」「親魏倭王」「安東大將軍」などの称号をもらってきた王たちは、中国の皇帝に「朝貢」を行い、「冊封」を受けました。しかし、遣隋使は中国の皇帝からの冊封を求めませんでした。

倉本一宏氏は『蘇我氏～古代豪族の興亡』で次のように主張します。

蘇我馬子、推古天皇、厩戸王子たちは、中国の皇帝から独立した君主を戴くことを隋から認められることによって、朝鮮諸国に対する優位性を主張し、「東夷の小帝国」を構築しようとしたのである。

内政面＝冠位十二階、憲法十七条

さて、推古11年（603）10月に、飛鳥の北方に、それまでの豊浦宮とは隔絶した規模と構造を持つ小墾田宮が造営されました。どこにあったのかというと、雷丘（いかずちのおか）東方遺跡一帯と想像されます。ここは、かつて、稲目の邸宅が営まれた場所であり、当初から蘇我氏の勢力圏の中核でした。

そして推古11年12月には有名な「冠位十二階」が制定され、翌12年（604）正月に賜与されます。これは小墾田宮における最初の朝賀に間に合うように制定されました。

ところで、冠位十二階の制とそれまでの氏姓制度とはどのように違うのでしょうか？

これまでの、氏族ごとに賜って世襲された姓とは異なり、個人の才能や功績、忠誠に応じて授けられたもので、その官人一代限りのものであり、また功績による昇進の可能性も開かれていました。

「冠位十二階」の制度によって、倭国の支配者層は**氏姓制度**の世襲制から、官僚制的な集団に自己再編成する道へと一歩を踏み出したことになります。

「十二階」あった冠位ですが、実際は「**徳**」「**仁**」「**礼**」「**信**」「**義**」「**智**」という6つに「大」と「小」をつけた12ランクに官人を編制していきましたね。

では、トロイカ体制の中核にいる**蘇我馬子の冠位は何でしたっけ？** 「大徳」「小徳」でしょうか？

蘇我馬子の冠位は「ない」が正解ですね。厳密に言えば、**蘇我馬子は冠位を「もらう側」ではなく「与える側」**にいました。正確に言うと、この冠位を授けられたのは、マヘツキミ層以下の中央豪族層（律令制の四位以下）であって、冠位十二階制定以前から紫冠を用いていた大臣家としての蘇我氏や、王族、さらに地方豪族は、授位範囲の枠外にありました。ですから、馬子はこの冠位を制定し、中央豪族層に授ける役割を担っていたのです。

また、有名な「**十七条憲法**」も制定されました。これは、法律というよりは、諸豪族に対する政治的**服務規程や道徳的訓戒**と言うべき性格のものでした。ですから、十七条憲法が律令制の成立に直接結びついたわけではありませんが、少なくとも隋との外交交渉の場で倭国の政治理念を示そうとしたことは間違いありません。

これら推古天皇の時代に行われた「国政改革」は、結局、不徹底なものとならざるを得ませんでした。もともと、「律令国家の建設」を目指して始めたものではなかったですから、当たり前のことだと言えます。

そして、**倉本一宏氏**は、次のようにまとめます。

天武の代以降、古代国家建設の起点として撰ばれたのが、推古の代に国政に参与していた厩戸王子であった関係上、偉大な「聖徳太子」の政治を妨害して、その「改革」の歩みを遅くした敵対者が必要となった。その役割として撰ばれたのが馬子をはじめとする蘇我氏だったのである。